

【実践研究課題名】

複式学級における異学年の協働の学びに関する研究

—生活科における共通テーマのある教材と複式学級における異学年間の学び合い—

研究代表者氏名 船越 勝

共同研究者氏名 中西 大 (附属小学校)

1. 複式学級における異学年の協働の学びに関する授業研究の成果

これまで私たちは、3年間生活科を基軸に、昨年度は中学年における理科に焦点を当てて、複式学級における異学年の共通テーマによる学びの可能性について、実証的な研究を積み重ねてきた。今年度は改めて生活科に立ち戻り、同じく異学年の共通テーマによる学習や21世紀型能力の形成との関係について、生活科の教科の特性にも焦点を当てて研究を継続することとなった。そして、今年度も附属小学校での中西大先生の複式学級における授業を中心に授業研究を行った。

複式学級のカリキュラムと授業づくりは、従来異学年異内容で設定されていて、それを担任の教師が「わたり」と呼ばれる直間移動で指導することが一般的である。また、以前は異学年同一内容で設定され、いわゆるA・B年度方式で行われることもあったが、文部科学省の「学力学習状況調査」が実施されるようになってからは、島根県などの一部を除いて、この方式は実施することが難しくなったのである。

このように、現在は、複式学級では、学年の違いから学習内容は異内容となっている。しかし、折角複数の学年の子どもたちが同じ教室という空間に存在しているのに、全くかかわりが無い状態で学びが行われるのはもったいないというのが私たちの初発の問題意識であった。そして、両学年の学習内容は異内容であるにもかかわらず、同時に、以下のような両学年に共通項という「仕掛け」を設定し、共通テーマを置いたカリキュラム・デザインを行うという視点から単元計画をするようにした。

- ・共通のテーマを設定する。
- ・共通のテーマが、各学年の学びにつながるよう、関連性を持たせる。
- ・下学年の取り組みや学習内容が、上学年に生かされるような教材を設定する。
- ・過年度を含む上学年の取り組みや学習内容を、下学年に伝えられるような教材を設定する。
- ・無理のない範囲で、異学年同士が学習活動に関われるようにする。
- ・下学年は予習、上学年は復習の意味も込めて学習活動に関われるようにする。(スパイラル学習)
- ・同時間接指導を強く意識し、各学年で学びを進められるように指導する。

すなわち、各学年に独自の内容が設定された「異学年・異内容」というカリキュラムの様式に共通項を設定し、両学年の学びに橋渡しをする仕掛けを用意するということである。

2. 電車に関する学びを創る

—複式学級における生活科の教材開発と授業づくりに関わって—

(1) 学習指導要領における位置づけ

今回の生活科の教材開発は、電車に関する学びである。この電車に関する学びの学習指導要領における位置づけをまず確認しておこう。小学校学習指導要領における生活科の学習内容に関わっては、①学校、家庭及び地域の生活に関する内容、②身近な人々、社会及び自然とかかわる活動に関する内容、③自分自身の生活や成長に関する内容の3つから構成されている。電車に関する学びは、②身近な人々、社会及び自然とかかわる活動に関する内容のなかに位置づいており、具体的には、公共物や公共施設を利用する活動に関わっている。学習指導要領の規定を引用すると、「公共物や公共施設を利用する活動を通して、それらのよさを感じたり働きを捉えたりすることができ、

身の回りにはみんなで使うものがあることやそれらを支えている人々がいることなどが分かるとともに、それらを大切に、安全に気を付けて正しく利用しようとする」1)と述べられている。

また、『小学校学習指導要領解説 生活科編』によると、「公共物とは、例えば、地域や公園にあるベンチ、遊具、水飲み場、トイレ、ごみ箱、図書館や児童館の本、博物館の展示物、乗り物、道路標識や横断旗など、みんなが利用するものが考えられる。公共施設としては、公園、児童館、集会所、公民館、図書館、博物館、美術館、駅、バスターミナル、防災倉庫、避難場所など、みんなで使う施設が考えられる。これらのほかにも、みんなが利用する掲示板や掲示物、多くの人々が利用する河川敷や広場などを含めて幅広くとらえていくことが大切である」2)とされている。したがって、電車に関する学びは、乗り物や場合によっては駅などにかかわるもので、一般化して言うと、公共交通機関に関する学習に位置付けることができるであろう。

(2) 単元「自慢の電車でGO！」のデザイン

今年度の生活科の学習として、電車に関する学びを計画し、単元名は「自慢の電車でGO！」とした。そして、1年生は「電車ごっこ」、2年生は「街の楽しい電車たち」である。

単元目標は、次のように設定されている。

1年生：遊び場やものを使って遊ぶ活動とおし、みんなで遊ぶ楽しさや工夫して遊びをつくる面白さに気付くとともに、場や道具を大切に、安全に気を付けて遊べるようにする。

2年生：自分たちが住む街の魅力を探る活動とおし、町の人々・社会・公共施設などに興味を持つとともに、そこで働いている人の工夫や努力がわかる。また、それらに親しみや愛着を持ってよりよく生活のなかで利用できるようにする。

(3) 教材の価値

次に、子どもたちが学ぶこの単元の教材は、どのような教育的価値を持っているのか。

1年生は、「『〇〇ごっこ』をして遊ぶことが多い幼児期から小学校低学年へと成長している。遊びに年齢の区分はなく『電車ごっこ』は、イメージを膨らませて遊ぶ遊びであるため、2年生から楽しい電車にするアイデアをもらい、自分たちの遊びを活性化する。子どもたちが持つ情報を広げて生かし、思考する子どもを育てることにつながる価値を含むと考えている」とされている。

他方、2年生は、「和歌山市で走っている電車を扱う。多くの人が喜べる楽しい工夫があることを確認し、自分が通う学校のある和歌山市の誇りだと思い、さらに街を好きになるきっかけとなる価値を含むと考えている。そこから、さらに探検を進めようとする今後の学習への意欲も期待できる。街にかわいい電車が走っていることから、働く人の努力があり、お客さんの思いとともに楽しさが生まれることに気付けるはずである」と設定されている。

(4) 共通テーマの設定と学びを協働化する必然性と仕掛け

今回の単元のデザインにあたって、「自慢の電車でGO！」という単元名に表れているように、共通のテーマとなるのは、電車である。2年生は、紀の川市と和歌山市をつなぐ貴志川線を今回の学習対象にしている。貴志川線は、乗客を増加させるための様々な工夫で全国的に知られており、具体的には「たま駅長」や「たま電車」・「うめ星電車」などが有名である。こうした企画のユニークさで、地元の利用客だけでなく、全国から乗客を集めることに成功しており、それが地元の誇りにもつながっているという。見学も含めた、こうしたユニークな貴志川線の取り組みについて2年生は学びを深めていくのであるが、1年生の「電車ごっこ」とそのための段ボールによる「電車づくり」を進めていく際に、1年生の電車に関する情報不足から、必然的に2年生の関わりが要請されることになる。これが2年生と1年生の学びの協働化の＜仕掛け＞である。

このように、今回の電車に関する学びは、地域との関係も視野に入れつつ、集客を高めるための電車を楽しめるものにする工夫という点に焦点を当てた教材開発と実践になっているのである。

3. 公共交通機関に関する先行実践からの示唆

他方、こうした電車に関する実践は、電車そのものが子どもたちの興味・関心を持っている、大好きな学習材であるので、様々な先行実践が追求されてきた。電車も含めて、もう少し広く公共交通機関というようにすると、多くの学校で、バスや電車への乗車体験と、そのプロセスでの切符の購入や改札の通り方、乗り方や降り方、さらには、乗車に関するルールやマナーの学習などに結び付けた実践が行われているはずである。そのなかでも、以下

の2つの実践は、生活科における公共交通機関に関する「深い学び」として注目されてきた。

(1) 有田和正「バスの運転手」の実践

有田和正氏は、ネタ開発をとことん追求した「生活科・社会科の授業の名人」と呼ばれた人で、筑波大学附属小学校教諭を経て、愛知教育大学教授などを歴任した実践家であり、研究者である。有田氏の実践史のなかでも、この「バスの運転手」の実践はもっとも有名なものの1つであり、公共交通機関の実践を考えるうえで、多くの示唆を与えてくれる。

有田氏のこの「バスの運転手」の実践を有名にしたのは、その発問の定式化である。まず導入で有田氏は、「バスというものを知っていますか？」の発問をする。この発問は、本時の学習対象であるバスを子どもたちに想起させるとともに、バスを知らない子どもなどはないので、挑発することとなり、「馬鹿にしないで!!」と子どもたちを学びにさせていく役割も果たしている。展開に入り、発問「バスにはタイヤが何個ついていますか？」という発問をし、全員が手を上げられる比較的やさしいものから授業に入っていくのである。その後、つり革や座席、ブザー、窓ガラスなども問うていく。そして、展開のポイントになるのが、有名な「バスの運転手さんは、運転中、どこを見て運転していますか？」という発問になる。これは「バスの運転手さんは、どんな仕事をしていますか？」という一般的に行われる発問と異なり、子どもたちの意欲的な追求を導き出す。なぜなら、当然前を見て運転しているという「正答」がまず出されるが、決して前だけでなく、後や横も見ながら運転している。なぜなら、安全性の確保のためである。この「バスの運転手さんは、運転中、どこを見て運転していますか？」という発問を行うことによって、誰にでも子どもが追究する授業を創り出すことができるのである。

この発問は、そのまま電車の運転手に変えても実践可能である。

(2) 倉持祐二「電車を発車させているのはだれ？—鉄道ではたらく人たち—」の実践

公共交通機関の実践に関わって、もう一つ注目すべき実践は、倉持祐二氏の「電車を発車させているのはだれ？—鉄道ではたらく人たち—」の実践である。倉持氏は、奈良教育大学附属小学校教諭を永らく務め、現在は京都橘大学教授である。

この実践は、第一次の「近鉄奈良駅って知ってる？」で、ホームはどうなっているかや駅の地図づくりをした上で、第二次の「電車を発車させているのはだれ？」から構成されている。この「電車を発車させているのはだれ？」という実践課題に関わっては、二回の駅調べも介在させながら、信号係（信号係が発車OKの合図を運転手に送る）、放送係（放送係が発車とドアが閉まることを乗客に知らせる）、車掌（車掌が発車合図の笛を吹く）、運転手など様々な人が電車を発車させるために関わっていることが、事実に基づいた討論によって明らかにされていくのである。これは、電車を運転するという行為が、単純な運転手が個人で行う行為であると単純に言えないような、安全性を確保するための様々なシステムが構築されていることを子どもたちが探究を通して明らかにしていくものである。ここがワンマンバスを運行するのを運転手個人が担っているというものと大きな違いである。

4. 中西実践との間にあるもの

こうした有田実践や倉持実践と、私たちの中西実践を比較した場合に、中西実践は電車を楽しくする工夫に見られるように、電車そのものや、そのことを通してより多くの集客を行って、経営の安定化を図ったり、沿線の魅力を知ってもらったりするというように、電車と地域の関係が視点に置かれている。しかし、有田実践や倉持実践は、運転手さんなどのどちらも公共交通機関で働く人、ないしはその人と電車との関係が視点になっている。

こうした実践における支店の違いは、どちらが正しいというものではなく、公共交通機関が持っている多面的な性格のうちのある面にそれぞれスポットを当てていて、その当て方の違いである。これは、主には中西実践で言えば、2年生の学習内容の違いとして現れてくるだろう。

しかし、こうした2年生の学習からサジェッションを受けて、展開していく1年生の「電車ごっこ」は大きく違ったものになっていくはずである。中西実践では、電車の飾りや外観の工夫をして「電車ごっこ」をすることになるだろう。他方で、有田実践や倉持実践をベースにして、「電車ごっこ」をするならば、運転手さんの役割をしている子どもは、信号を見たり、社会の乗客がちゃんと安全に載っているかやきちんと乗り降りしているかを確認しながら運転することになる。あるいは、車掌さんや駅長さんなどと協力しながら、安全な運航を行っていくことになるだろう。

ごっこ学習は、戦後社会科や生活科の実践で、たとえば、ポストの実践や「郵便屋さんごっこ」など様々な実践が積み重ねられているが、それはごっこ学習を通して活動や体験をするだけが目的なのではなく、そのことを通して何を認識させるかということが重要だったはずである。そうした視点からも、改めて実践を再検討してみたい。

注

- 1) 文部科学省編『小学校学習指導要領（平成29年告示）』東洋館出版社、2018年、113頁。
- 2) 文部科学省編『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 生活編』東洋館出版、2018年、36頁。

参考文献

1. 文部科学省編『小学校学習指導要領（平成29年告示）』東洋館出版社、2018年。
2. 文部科学省編『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 生活編』東洋館出版、2018年。
3. 有田和正著『名人への道 社会科教師』日本書籍、1989年。
4. 井戸垣忠男「子どもの追究活動を育てる小学校社会科指導法—有田和正氏のネタ活用の授業を手がかりに—」社会系教科教育学会編『社会系教科教育学研究』第14号、2002年。
5. 倉持祐二「電車を発車させているのはだれ？—鉄道ではたらく人たち—」『歴史地理教育』480号、1990年。
6. 中野照雄「低学年社会科・生活科の到達点と課題」歴史教育者協議会編『歴史教育・社会科教育年報 1994年版』三省堂、1994年。